平成２３年度卒業証書授与式・専攻科修了証書授与式告示

本日、ここに、平成２３年度鈴鹿工業高等専門学校卒業証書並びに修了証書授与式を執り行うにあたり、御来賓並びに保護者の皆様をはじめ、多数の方々のご臨席を賜り、喜びを分かち合えますことを心から感謝し、お礼申し上げます。

本日、晴れて鈴鹿工業高等専門学校を卒業する２０８名、専攻科を修了する２７名の皆さん、そして、本日まで物心両面にわたり惜しみない御支援をいただきました保護者の皆様、おめでとうございます。新しい門出を心からお祝い申し上げます。無事この日を迎えられたことを、皆さんは大いに誇りに思ってください。本校は、知・徳・体の全人的成長を願って、やや厳しい学業、キャンパス内外での課題やルールを課してきました。皆さんはそれに果敢に立ち向かい乗り越えてきたのです。こみあげているであろう充実感や達成感は、充分これまでの努力に値するものであり、１２０万人を数える全国の同世代の若者の誰もが共有できる性格のものではないと思います。

さて、皆さんが本校に在学していた期間、社会では急激かつ重大な変化が起こっていました。実現を夢見ながらも不可能と考えられていたことが実現したり、精神を高揚させられるような輝かしい成果もあげられます。

2007 年には京都大学の山中教授がＩＰＳ細胞の作製に成功し、素粒子物理学理論で小林・益川両教授がノーベル物理学賞を、オワンクラゲの緑色蛍光蛋白質の発見・分離により下村教授がノーベル化学賞を受賞するという快挙がありました。一昨年は、クロスカップリングの開発による鈴木・根岸両教授のノーベル化学賞受賞などがあり、生物応用化学科や応用物質工学専攻の学生諸君には印象に残る年になったことと思います。また、「はやぶさ」の帰還、物議を醸したスーパーコンピュータ「京」の処理速度世界一の達成、自律式電波塔としては世界一の 634 メートルに達した「東京スカイツリー」の竣工などは、日本の技術力の高さを世界に示すこととなりました。

スポーツの世界では、2008 年の北京オリンピックで水泳の北島が二種目二連覇を果たし、2009 年はワールドベースボールクラシックでの日本の連覇がありました。イチローの 10 年連続 200 本安打は 2010 年、深夜の日本を歓喜の渦に巻き込んだアジアカップの優勝は 2011 年１月、なでしこジャパンの女子ワールドカップ優勝は 7 月でした。

また、皆さんが入学した頃は変化が起こることを想定すらできなかったことが現実に起こっています。アメリカに黒人としてはじめての大統領が誕生し、日本でも民主党中心内閣へと政権交代が起こりました。ツイッターやソーシャルネットワーキングの普及が、チュニジアの民主化運動を引き起こし、「アラブの春」といわれるように、エジプト、リビアなどに広く波及して、長期独裁政権を放逐したり脅かすなどと誰が考えたでしょうか。

経済面では、1968 年以来世界第２位を誇り、不動のものと思われた日本の GDP（国内総生産）もついに中国の後塵を拝することになりました。リーマンショックは 2008 年でしたが、この言葉を忘れてしまうほど、ギリシャ危機、EU

危機が新聞の見出しを踊り、東日本大震災やタイの洪水が自動車などの製品部品の供給網・サプライチェーンを寸断する現実がありました。

自然からの重大な挑戦も受けています。新型インフルエンザの脅威にさらされたのは2009年でしたが、口蹄疫、鳥インフルエンザの大量発生と続きました。地球温暖化の影響と思われる猛暑や豪雪、そして、忘れてはならない昨年の東北太平洋沖地震です。昨年3月11日、皆さんが最上級学年に進級できるかどうかを教職員で検討していた進級判定会議の最中の2時46分でした。巨大地震・大津波・原発事故など、惨状には胸を締めつけられる思いです。改めて、亡くなられた皆様のご冥福をお祈りするとともに、被災地の一刻も早い復旧・復興を願いたいと思います。

このように、皆さんが在学期間中に起きたことは、それ以前の同期間とは比較にならないスピードとスケールを持った巨大なうねりです。成長した皆さんが見聞し感じる次の5年間の変化は、予測の範囲をさらに大きく超えることになるかも知れません。30年ほど前、アメリカの経済学者ガルブレイスが「不確実性の時代」で示唆した現実、ほぼ同時代に経営学者ドラッカーが使った「乱気流の時代」の言葉と重なります。ドラッカーの名前は「もしドラ」で広く知られるようになりましたので、皆さんも耳にしたり、著書を手にしたかも知れません。

光と陰が交錯する激動の時代を、皆さんはここ鈴鹿高専のキャンパスで過ごしてきました。外の世界が大きく変化する中、本校でも、独立行政法人が設置する高等専門学校として、教育研究の質的向上と学校の効果的マネジメントを目指してさまざまな挑戦を行い、改革を行ってきました。学科の4，5年と専攻科で構成する複合型生産システム工学プログラムは、日本技術者教育認定機構（JABEE）の認定を受け、学士過程レベルの国際的水準を満たす工学教育と認められています。また、実践的エンジニアの養成を目指し、民間企業でエキスパートとして活躍する技術者のスキルと感性を活用した創造工学プログラムや、環境志向・価値創造型エンジニアの育成プログラムを実施しました。風力発電装置や電気自動車の新規導入などは、多くの環境関連技術に接することができるキャンパス環境を作ることによって、環境問題への意識を高め、社会に貢献するエンジニアを目指していただきたいとの思いからです。地球温暖化の進行を防ぎながら人類の幸福を増進する技術として、環境技術が皆さんの強みになると確信しています。

また、これからThink globally、 Act locallyを実践するグローバル・ローカルの「グローカルエンジニア」を目ざしてほしいとの思いから、ネイティブスピーカーによる英語少人数教育を実施するなど様々な工夫を行ってきました。平均的にTOEICスコアの向上が見られたことは喜ばしいことと思っています。

他高専から一目置かれているのが、活発な課外活動です。高専体育大会、音楽・美術・文芸活動、ロボット、プログラミング、パテント、英語プレゼンテーションなど各種コンテストでは、当初予想した以上の好成績をあげたクラブが多く、全国大会への派遣経費が不足して保護者の皆様に心苦しくも負担増をお願いせざるを得なかったことを思い出します。秋の高専祭では、斬新でカラフルなパ

ンフレットを作製し、学科展示を第二体育館で一体的に実施するという大胆なチャレンジをしてくれました。５年生のステージパフォーマンス「メモリーズ」も年々完成度をあげ、今年度ステージ終盤の雨は、天の感動の涙だったに違いありません。改めて「感動をありがとう」の言葉を贈りたいと思います。

元の東大総長で三菱総合研究所理事長の小宮山先生は、日本は、課題先進国として世界の手探りの最前線にいるとして、これらの諸課題を解決して他国の手本になっていく「課題解決先進国」を目ざそうと言っています。少子高齢化の進行、GDP の２倍の 1000 兆円に及ぶ公的債務、エネルギー問題、国内産業の空洞化など、従来から認識されていた課題ですが、東日本大震災と EU の金融危機が日本の政治を覚醒させたかのように世の中が騒がしくなっている中で、私たちは、一つづつ「あわてず」「あせらず」「あきらめずに」取り組んでいく必要があります。皆さんは在学中、確かな知識に加えて、実際に使える技術を体で修得したという点で、大学卒業生などにも負けない一日の長があります。

「不確実性の時代」「乱気流の時代」に旅立つ皆さんに２つのことを話しておきたいと思います。

一つは、湿地に生える葦のように強くしなやかな生き方を目指していただきたいと言うことです。葦は、イネ科の植物ですが、１７世紀フランスの科学者であるパスカルは、「人間は考える葦である」といい、人間を葦に例えて、宇宙空間の中のひ弱な存在でも、思考によって偉大なことが達成できるのだと教えてくれました。ちょっとした風にもなびき、川の流れに従うだけで、自ら考え、行動することができないように見える葦ですが、実際はしっかり根を下ろしていて、しなやかに流れに乗り、また元に戻る弾力性を持っているのです。本校に入学したばかりの皆さんは、鈴鹿高専という土壌に根を下ろしたばかりの葦に例えられます。この根から伸びる地下の茎は、条件さえ良ければ１年に５メートルも伸び、適当な間隔で根をおろすといいます。皆さんがおろした根は、知識を得、体力を蓄え、経験を積んで茎を地下に伸ばし、そこでしっかり根を張り巡らせ、他の仲間の茎とも絡み合いながら、また別の根を下ろしてきました。皆さんが高専で獲得した知識、技術、人間性、感性はもちろん、新しく出会った仲間や恩師のネットワークは、哲学者のカントや西田幾多郎流に言えば、「真実」のものであり、「善」であり「美しい」ものです。これらを、松尾芭蕉が永く変わらないものと考えた「不易」のものとして大切にしながら、自信を持って変化の激しい時代の新しい「流行」へ、しなやかに、かつ果敢にチャレンジしていってほしいのです。hungry と foolish に stay したスティーブン・ジョブスが、スマートフォンを世に広げたということを例示としてあげることができるのかも知れません。

二つめは、最善の選択ということです。「人生の岐路」という言葉があるように、人生には時々に大きな転換期があります。そして、意識するとしないとに関わらず、選択を繰り返しながらより良い人生を目指すことになります。また、皆さんの多くは新成人としてこれまで制約されていた法律上の自由と責任を得、また、国・地方レベルの選挙、裁判への参画といった様々な機会、チャンスを持つことになります。皆さんが義務教育後の進路として選択したのが本校であり、卒

業後の進路選択も、就職・進学と各人各様にすでに済んでいますが、これからも「コンクリートか人か」「環境か成長か」「脱原発か依存継続か」「非武装中立か日米同盟か」、裁判員であれば「死刑か無期か」、などの重大な問題から「珈琲か紅茶か」などの些細な問題に至るまで、二律背反的な選択の問題はついて回ります。これらの選択には、自分が今置かれた経済的条件や環境に制約される面もあり、全く自由な選択はあり得ませんが、時々の状況に応じた最善の選択は可能です。昨日の選択に後悔することはあっても、今日の自分に責任を持ち、明日のより良い選択に備えることが重要だと思うのです。そのためにも、社会の動向を的確に把握し、自身の知・徳・体の資源を充実させながら、自分自身のより良いマネジメントを心掛けなければなりません。いざという時に直面して、選択を外から強いられるのではなく、主体的に選択できてこそ明日の自分に責任が持てるというものです。そして、選択に際しては、東日本大震災や福島第一原発事故の被災地に寄り添う気持ち、絆を大切にする気持ちを風化させてはいけません。「天を恨まず運命に耐え助け合っていく」と卒業式で答辞を読んだ気仙沼の中学生は今、一関の高専で頑張っています。自然の偶然の采配によって被災を免れた私たちは、現在置かれている状況に素直に感謝し、現在の職務、皆さんであれば自ら選んだ進路に、改めて真摯に向き合い、責任を自覚して最善を尽くすことです。

皆さんは、一人ひとりが、家族の皆さんにとってはもちろん、私たち教職員にとっても誇りとする大切な財産です。この思いは、今年度で定年を迎える内藤教授、宇和川事務部長、異動する数学の安富、情報の和田両先生、柴川総務課長も同様の思いだと思います。５年前、会場の学科卒業生と一緒に本校に赴任した私も職を離れることになりました。「君たちと一緒に成長したい」と願ってきましたが、微分で表せる心身の成長率では到底かないませんでした。今、心の中で一つだけ確信していることがあります。間違いなく、「君たちと過ごした５年間に感謝し、心の底から君たちの幸せと成功を祈っている」と言うことです。

本校は、このように構成員の新陳代謝を繰り返しながらも営々と半世紀に及ぶ歴史を刻み、来年度は創立 50 周年を迎えることになりましたが、この機会に、本校の 50 ＋ミッションを「技術者養成に関する地域の中核的教育機関として、国際的に活躍するひとづくりと、新しい価値の創造により、社会の発展に貢献する」として、次の一歩を踏み出すことにしました。

今日は本校が物心両面でお世話になっている多数の御来賓の皆様とともに、３代目校長の久保田先生、皆さんの先輩にあたる県議会議員の下野幸助様にもお越しいただいております。つぎの 50 年も引き続き本校の発展のために御支援をお願いします。

皆さんにとって本校が、毎日昼休みに流れた校歌とともに、永く精神的な拠り所であり、財産であってほしいと願っています。本校で培った知力・人間力・体力と、人的なつながりが、今後の皆さんの充実した生活に大いに活かされることを祈って私の挨拶とします。

平成２４年３月２２日

鈴鹿工業高等専門学校長

高橋　誠記